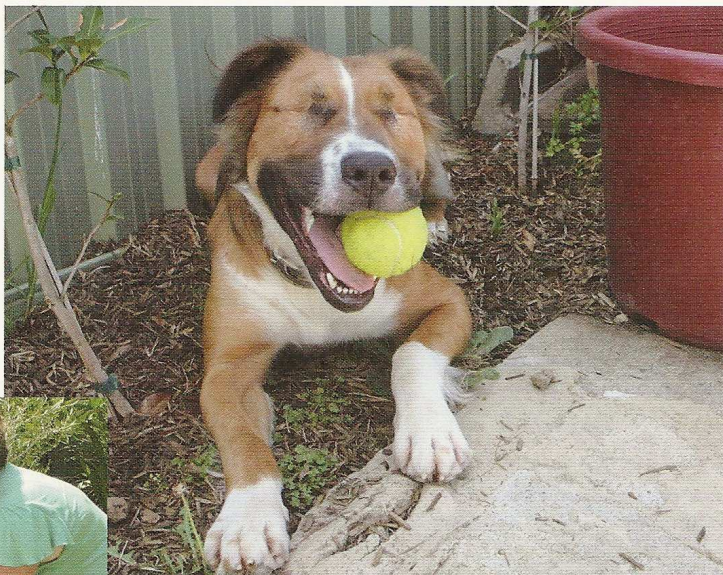


文・写真:ハイランド真理子

# 全盲の犬マイロンが 人々に幸せを分け与える



目が見えなくてもボールを追って、元気に駆け回るマイロン。その姿に多くの人が勇気づけられています。



オーストラリアでは目の見えない犬を飼っている人たちが、ネットワークを作っています。ぜひホームページにアクセスしてみてください  
[www.blinddogs.net](http://www.blinddogs.net)



保護して2カ月が過ぎたころには緑内障が発覚。両目の摘出手術を受けました。それからも強度のアレルギーや癩癬もみつかりましたが、ラケルさんご夫妻の献身的な愛と努力で、マイロンはそれらをすべて乗り越えたのです。

「私はブルドッグを欲しかったのだけれど、いつも保護するのはちがう犬種。だけど、飼ってみると好きになっってしまうんです」

とは、ラケル・ウッドさん。

これまで何頭もの捨てられた犬を助けたラケルさんの愛犬が亡くなり、ご主人とふたりですっかり気を落としていたときのこと。近所の人から「今ね、捨てられた犬が、道端でお産をしているわよ」との知らせが舞いこんできました。

ラケルさんは、そのうちの1頭の子犬をもらって家に連れて帰ることに。そのあとのことです。その子犬が全盲だとわかったのは…。

「私たちは遠方に暮れました。死んだ犬の代わりにやってきた新しい生命だと思っただけ」。

獣医師に相談すると、「子犬もあなたたちも大変な思いをするから、安楽死をさせたほうが賢明です」と言われたそうです。諦めずに、もうひとりの獣医師に相談したら、「目が見えなくても、パピースクールに入れば、何とかやれるよ。大丈夫だよ」と言われたのです。

ラケルさんはマイロンを、早速パ

ピースクールに連れて行きましたが、何と彼は優等生。おとなしいし、いつでもハッピーでも利口だったので。たちまちお座りも、お手もできるようになりました。他に、ボールを投げるとフェッチ(投げたボールを捜して持つてくること)をしたり、ダンスまでするようになりました。

そしてマイロンは今、「コミュニケーション」に励んでいます。ラケルさんはマイロンをナーシングホーム(養老院)や学校などさまざまな場所に連れて行って、チャリティー活動をしているのです。

マイロンに会う人たちは、彼の生命力の強さやハッピーさに心を打たれるようです。マイロンに会う人たちの感動の仕方が、人それぞれにちがうとラケルさんは言います。子どもたちは「目が見えなくてどうしてあんな芸ができるのだろう」とひたすら驚き、心配の人たちは、「全盲でしかも病気を抱けていても、こんなにハッピーにいられるなんて」とマイロンから元気をもらうのだそうです。

では、マイロンの幸せは？  
それはもちろん、皆に幸せを与えることです。